

ICA2014年度の活動へのご挨拶

サイバー絆研究所(ICA)の活動に、ご理解とご協力いただいておりますことを、感謝申し上げます。すでに新しい年度に入ってしまったが、昨年10月11日の神戸での研究啓蒙的な集会の後、あまり外部に働きかけるような活動をしてきておらず、また、サイトの更新もしておりませんでしたから、「何をやっているのだろう」、と関係者の方々を含めて、疑問を持たれておられたのではないかと思います。このことについて、まずお詫びいたします。

ICAの活動を開始したのは、2011年の1月、東北大震災の少し前なのでちょうど3年となります。以来、この会の Mission 使命や目標 Goal、取り組み方 Approach は、次第に明確かつ具体的になってきました。とくに昨年度の後半は、外への働き掛けには至っておりませんが、ウェブサイトのトップページに掲げている活動領域のそれぞれをどう展開するかについて、理事や協力者の方々と、さまざまな議論を交わし内容を深めてきました。その成果を本年度は、具体的に披露できる段階になりました。

本年度まず、もっとも力を入れようとしているのは、「薬づくりの R&D モデルの探索」事業です。この活動の前提になっているのが、先月末に日経 BP 社から刊行された「薬づくりの未来～危機を打破する新しい R&D モデル」を翻訳したことです。私たちはこの本と姉妹関係にある翻訳本「薬づくりの真実」を、すでに CBI 学会から刊行しています。その経験を踏まて、本年度の前半では、「我が国の薬づくりの明日」を探り、とくに ICT の活用という視点から、新しいフロンティア、新しい専門家、新しいパートナーシップを探る、調査会、検討会、研究講演会などを開催し、独自の提案をしたいと考えています。

次の目標は、昨年の神戸で開催したシンポジウムのテーマである「p-Medicine と3次予防」の実践に前進することです。この活動は、生活者が参加したデジタル健康医療イノベーション(ハイクラウド計画)に関わっています。これからの健康医療は、ICT と同じように猛烈に進歩しているゲノム科学に後押しされると考えています。この流れは数々のイノベーションに関係していますが、それらの推進のカギを握っているのが、健康医療サービスの受け手である生活者の参加であることは、欧米のこの領域の先端的な研究者や関係者の間では、すでに常識となっています。私たち ICA も同じような認識に基づいてハイクラウド計画によって具体的な取組を模索してきましたが、そこで到達したのが「3次予防」の概念です。その特徴は疾患ごとに違った取組をしなければならないことです。

上記の2つの事業には、参加者のネット技法を高めること、ネット講義による人材育

成、社会が先導する薬づくり、薬に依存しない介入法 **Non Drug/Pharmacological Intervention** という新しい科学研究や、健康生活を支える食材などに関わる事業も見えてきています。ICA のサイトのトップページ(のタイトルバー)には、「人を結び、知をつないで、学びと仕事の機会を創出する」という言葉がありますが、これは決して空言ではありません。

これまでは、「ICA が何をめざしているのかわかりにくい」と、外部の方だけでなく、内部の方にもよく言われていました。しかし今や、そのような声はほとんど消え、「個々の目標を如何に実現するか」に議論が集約してきました。「やることを平易に、よく説明して協力者を増やそう」というのが、今年度前半の合言葉にしています。関係者の皆様には、ぜひご「自分の組織」として、関心のある事業や活動に、お気軽に参加して下さることを期待しております。本年度の活動計画の概要に関しましては、近日中にサイトのおく予定です。本年度も、よろしく申し上げます。

神沼二眞(かみぬま つぐちか、サイバー絆研究所理事長)